

## 平成19年度博物館協議会議事録

### 1 日時及び場所

(1) 日時 平成20年3月7日(金)午前10時から正午

(2) 場所 兵庫県立人と自然の博物館 実習室

### 2 出席者および司会進行

委員(敬称略、五十音順)

岩木、上南木、貴多野、辻本、天川、楓、寺見、井川、坂田、端、山西(委員長)

ひとはくおよび社会教育課

岩槻館長、中瀬副館長、坂本次長、西向館長補佐、小林副課長(社会教育課)、田原室長、高橋室長、藤村課長、平松課長、客野室員、岡井主査

司会：西向館長補佐

### 3 議事

開会挨拶(岩槻)

昨年度の3月に5年間にわたる博物館の新展開を終えた。これまでに様々な活動を精力的に行ってきた。今後の活動にむけて、ご議論をよろしくお願いします。

事務局紹介

資料確認

委員紹介

以降、山西委員長による進行

(1) 博物館活動について

<報告>(坂本次長)

館の沿革、組織と職員数、トピックス、プロジェクト(丹波恐竜化石、次年度のフェアブル展)中期目標、個人別研究員の成果などについて館報に従って説明。

また、来年度の事業概要について、丹波恐竜化石、恐竜ラボの開設、企画展、フェアブル展、ボルネオジャングル体験スクール、ひとはくキャラバン、共生の広場、ひとはくフェスティバル、サイエンスショー、フロントスタッフ、セミナー、研究員ごとのセミナーの内容などについて、ひとはく手帖を用いて説明。

<議論>

委員長：事業評価についてご意見をお願いします。

委員長：手帖についてはどのように広報するのか。

博物館：今年は2万部印刷した。基本的に学校や県民局の窓口、病院などに配置する予定である。一般人には、ひとはくに問い合わせてもらい送付するか、あるいは県の機関などを通して配布する予定である。

委員：館報について。個人別の業績表を掲載するのは大変なことだと思うが、これはどこに配布されるのか。県民もこれを見ることができるのか。

博物館：主に全国の博物館や館の関係機関及び県の機関に配布する。一般の県民向けというものではない。

委員：様々な来訪団体が個別に紹介されているが、団体や個人がどのくらい来ているのか。また団体の種類、人数別に、それぞれが何年くらい継続して来館しているのか。あるいは団体での来訪者が再び個

人として来ることがあるのか。現状が5年前と比べてどのように変化したのか、団体の動向および個人の動向はどうなっているのか。このようなことについて、しっかりと分析されていれば、戦略として団体をねらうのか個人をねらうのかなどの戦略目標を立てることができる。このような点に鑑みると現状では不十分である。もし、分析がなされているのであれば、それに合わせた集客行動を起こすことができるが、そのような役割を果たす部門や役職、販売促進部門のようなものがあるのか。

博物館：リピーターについて、2年までの継続についてはリストとして掲載しているが、5年までは遡っていない。ただ、データはあるので今後ぜひ分析を行いたい。現在、来館団体向けの特注セミナー等をメニューとして用意しており、団体から要望があれば特別のセミナーを実施し、その満足度を上げて、来訪者に次は個人でも来たいと思っていただけるように努力はしている。しかし、各個人に対して入り口調査などは行っていないので、現状では団体客の一員としてきた人が個人としてどの程度来館しているのかについては状況を把握していない。

委員：20万のうち、団体客は何割くらいか？

博物館：館報の28ページに掲載しており、団体・個人あわせて21.6%である。

委員：個人が8割を占めるのかあるいは団体が8割のかで、対応のしかたが全く異なる。団体が多いならば代表にきっちり対応すべきで、マーケティング的にしっかりと分析して次の行動に生かす必要がある。もしも分析をしていないのであれば、分析して、次の行動に反映させる必要がある。

委員：館報の25ページに評価の指標などがあるが、ここにあるプログラム参加者の数や広がりも大事であるが、参加者がどのようなプログラムを受講し、そしてその学習を経てどのように変化していくのかということも大切である。このような観点に基づく評価指標はあるのか。

博物館：今、開発中である。今回提示している中期目標は多くの項目からなる数字を丸めたものである。満足度などは十分にフォローできていないのが現状で、第二期目の中期目標ではぜひ議論していきたいと考えている。ただ、現在までに養成されてきた担い手は主に個別のセミナーを通して養成されてきている。すなわち、研究員のファンになることで担い手が養成されているのが現状である。今後、新しい基本計画にあるように、セミナーとは異なる養成事業を始める予定であり、ご指摘の点についてはこのような方向で対応していきたい。ただ、担い手の養成についてはいまだ明快な結論に至っていない。

委員：学習の評価は難しい。生のデータでは人数や回数だけとなり質的な評価が難しい。定量的なものだけではなく、定性的な評価も必要であると思うので、検討していただきたい。

博物館：セミナー等においてはアンケート調査を行っているが、全般に評価は非常に高いのであまり意味がない。むしろ、評価は次の年のセミナーの数に現れるのではないかと考えている。

委員長：事業に参加されている方の意見が大切である。

委員：10年前と比べると博物館の活動内容は大幅に増えており、また個人別の評価も掲載されて大変な状況で館員は苦勞しているのではないかと心配する。一連の事業は博物館の職員が支えており、仕事が多すぎて職員がつぶれてしまわないかと心配である。正直なところ博物館の研究員の声はどうなっているのか。また、館として個人をどのように支えているのか、そのようなことを考えていただきたい。

博物館：行政側からみても、館が一体的に業務を行っているという印象を持っている。組織としてみれば、館長辞令で行政と研究職が一体となって業務を行っている体制が奏効しているのではないかと考えている。

博物館：現状では在外研究員制度がないのが不満である。当館は学生がいない研究所ということで適用機関から外されている。そろそろサバティカルのようなものを導入する必要があるのではないかという議論も出て来ており、在外研究員的なものができる仕組みを、今考えている。

委員：県民に近づいた活動を行うことは重要であるが、一方で研究活動も重要であり、そういう意味でのリフレッシュが必要である。

委員：素晴らしい事業を行っているとは評価している。ただ、新展開の活動は、一般の人々にいかに豊かな人生を送ってもらうのかということ念頭においているのか、あるいは次世代の担い手を担うことを念頭においているのかがわからない。これらを一緒にして評価してしまうのは問題がある。必ずしも全ての人がエキスパートになるわけではない。次世代育成として、若者にいかに興味を喚起させるのか。あるいは、ベテランの方に専門家向けのメニューを提供するのか等、様々なニーズがある。これらの個別のニーズに全て応えるのは難しいが、こちらがどういったプログラムを提供するのかということを考えてうえで評価指標を考えて、何でも評価するのではなく、それぞれの指標の方針を明確にすべきである。ねらいは専門家育成なのか次世代育成なのか、指標を持った上でのプログラム提供となっているのか。また、個々の取り組みが、どのような指標にむけたプログラムであるのか自覚しながら事業を行っているのか。一般に、評価は2回目、3回目のステップアップが難しくなる。そういった意味で、プログラムの発展のさせ方をどのように考えているのかが疑問である。

それから、プログラムの数が多いのに、なぜ担い手の活動数などが少ないのか。また、理科離れが著しいが、小学校などとのネットワークづくりはどのように行っているのか。

博物館：館報で示している指標群は新展開（博物館の改革）を受けており、中期的に活動をマネジメントするための道具として利用している。ひとはくは、当初、研究重視の施設であり、研究を大学と同じレベルで行うことが館の基盤であった。しかし、これらが必ずしも県民に反映されてこなかったという反省に基づいて新展開を始めた。新展開では、生涯学習の支援とシンクタンク活動への貢献を柱としている。元々、前例も十分な蓄積もない状況の中で試行的に作り上げた指標であり、その時点では適切なモデルもなかった。次からの指標では、全県に出て行くことなどを前提においた指標を設ける予定である。

また、ネットワークづくりについては、アウトリーチ事業であるキャラバン事業を通して行っている。実際の事業では、ネットワークづくりが重要で、それを踏まえた評価指標となるようにしている。館としても、一回切りの関係ではなく、継続的な関係をつくっていくということが大切と考えている。

担い手については、基本的には一緒に事業を活動を行ってくれる人と捉えており、そのような視点から養成事業を行ってきた。担い手として登録してもらわなくても、実際にはいろいろなところで一緒に活動している人もいる。どのようにしてこれらを指標にできるのかということを考えているところである。

委員：小学校や中学校の理科教育との連携についてはどうなっているのか。

博物館：オープンセミナーや各種セミナーを行っている。特にオープンセミナーは当日受付のもので、子ども達の理科の入り口となるように意図している。また、子どもの理科への関心を高めるために、教職員を対象としたセミナーも行っている。

委員：プログラムの提供は十分行っていることはわかるが、はじめから一緒に連携しているものはあるのか。

博物館：県立三田祥雲館高校、県立有馬高校に対しては、共同事業としてセミナーを行っており、これらのセミナーは授業の単位として認定される。また、県立大学附属中学校などとも長期的な連携プログラムを進めており、さらに小学校については恐竜化石発掘現場付近で化石発掘などを通じた連携プログラムを展開している。また、県の事業でも、高大等連携事業というものがあります。この”等”の中にひとはくが含まれており、県の事業の中でも教育機関などとのネットワークづくりの一翼を担うものとして位置付けられている。

また、評価指標などについては、ひとはくの動きが日本の博物館全体のスタンダードとなりつつある状況である。

## (2) あらたな人と自然の博物館基本計画について

<報告> (田原室長)

基本計画についての概要を説明。内容は新展開以降の展開を考えたもので、現在は内部調整の過程にある。第一章では策定済みの基本構想を整理、第二章では事業活動方針、第三章は演示を支えるプログラムについて、第四章はこれを受けたハードの計画、第五章は運営方針やマーケティングの方法について、第六章では今後の進め方についてそれぞれ述べている。

<議論>

委員：評価については、学校の場合は生徒の学力という指標がある。必ずしも、授業をたくさんすれば良いという訳ではない。どうなることが博物館としての成功なのかということが難しい。多くの人が来れば良いという訳ではない。人材育成が一つの答えと考えている。そのように考えると、入ってくる人の質も関係している。評価の中では、セミナーなどの成果をどのように図るのかということも考えるべきである。市民を養成とすることとはどういうことなのかということが大きな問題である。また、満足度が評価の項目としてよく取り上げられるが、これだけでは必ずしも十分ではない。市民として成長するプロセスに博物館が関わる仕組みが必要となっている。このような点について、自己点検の段階からもう一度考え直す必要がある。人数だけの問題ではない。行ってきたことがどのようなことに繋がっていくのか、そのようなことがわかるような指標となることを期待している。

委員：担い手の養成や、今まで博物館に来たことがない人たちを誘引することについて、ひとはくに欠けているのは、ひとはくの教育を受けた人が具体的にどのように社会に関わっていくことができるのかという視点である。切り口は自然だけではない。文学、昆虫と伝記などの新しい視点も必要で、新しい施設を造らなくても今の施設でできることもある。学んだことが産業や地域の活性化などに繋がっている必要があり、単なる勉強で終われば、それは自己満足に終わると思うが、それで十分なのか。その一方で、そこまでする必要が本当にあるのかという問題もある。むしろ研究に専念するという方向もある。最終的に何が世の中をどのように変えるのかという視点を持つことが重要で、単にたくさんのプログラムを行ってそして疲れたということでは終わってしまうのではないかと危惧している。

委員：ひとはくは学術レベルにとどまるつもりなのか。プログラムのカテゴリーとして、環境や文化など広範囲なことについて設定するのであれば、それぞれを私たちの生活とどのように結びつけるのかということが必要。基本計画の13ページにかかっているステップアップは学習者のステップアップなのか。16ページの担い手としてのステップアップはこれとは別物であるはずである。学習者としてのステップアップは13ページのとおりでよいが、担い手の養成のためには学習したことを実生活に結びつける場を設け、伝えるためのスキルを習得する必要がある、中身について知っているということは担い手養成とは直接関係ない。ところが、実際の担い手の養成については、オンザジョブトレーニングしか書かれていない。これだけでそんなにたくさんの人が育つのか。また担い手は量産するものでもない。少しでも実績をつみ、実生活と結びつけることができる人をこつこつ養成するしかない。また、担い手はどのように養成するのか。手を挙げた人のみを養成するという方針なのか。

博物館：ステップアップだけが担い手の養成の方法ではないという指摘は確かにその通りである。今までは、参加者がスキルアップすることにより、結果的に博物館の活動について来てくれるという構図があ

ったので、とりあえずこのスキルアップを切り口にしている。したがって、セミナーなどを通じてコツコツ養成を行っていくことが重要と考えている。また、このような点から、担い手養成を指標化しようとも試みている。

担い手養成については、分野や個性によっても異なると考えており、少し系統的に養成する必要がある。担い手がどのようなスキルを持つべきか、どのように関わっていくべきなのかはまだわからない面もある。例えば、博物館のパートナーである人と自然の会などは現在活発に活動しているし、地方でも一緒に事業などを行うことができるパートナーもたくさんある。現段階で、担い手によるイベントの回数は130回をすでに越えており、これをいかに増やしていくのかということが現在の課題である。

委員の指摘について、入り口は自然環境だけではないというのはたしかで、こちらでもそのような問題意識は持っている。どういう形で地域活性化等に結びつけていくのかについてはまだ議論できていない。

委員：新館の空間イメージは、自然に感動するというコンセプトであるのに、なぜ建物がこんなにふつうのものなのか。もっと、五感で感じるものでないと、来館者はあつとは思わない。もっと博物館らしくない建物でもよい。そこで展開されるプログラムなどを支えているのが研究や技術である。また、昆虫や自然のおもしろさがあるような演出の仕方もあるのではないか。エンターテインメントかとおもったら実はすごい研究をしていたという仕組みも求められ、演示の中に自然を伝えるメッセージや技術が入っているのが理想といえる。世界一のものをつくるという発想で、すごいものをつくってほしい。

委員：関心のない人をなぜこの博物館に必要なのか。担い手を創出するとあるが、担い手は、ひとにはく雇われるのか。

博物館：無関心層という言葉がそもそもおかしいという指摘は、基本計画策定委員会の中でもあった。未体験層に対して、自然環境の学習等何らかの形でお手伝いしたいと考えているが、とりあえず知っていただくことで活動を広げていくことが重要と考えている。担い手は博物館の活動を手伝う人というイメージがあるが、地域が活性化し、地域が良い方向に向かっていくのを手伝っていただく方を担い手として捉えている。このような広い意味での担い手と、直接的に館の事業を手伝う人も含めて、ここでは担い手としている。

委員：未定稿を見る限りでは、この計画の方向がわからない。誰が誰に向かって何をしようとしているのかわからない。誰が誰をスキルアップさせてあげたいのか、あるいはステップアップしてほしいのかなど立場が全くわからない。適切な言葉がないというが、言葉で通じないのであれば気持ちは通じない。なぜ、事業としてこれらのことを行いたいのか伝わらないのが問題である。さらに、文章においても、なぜ横文字がこんなにも多いのか。ふつうのひとに語りかける言葉で書く必要がある。それから、興味を持つことが関心を持つためのベースであり、興味は与えられるものではなく、自分の中でわくものである。このあたりのところをもう少し整理する必要がある。

博物館：報告書になるとどうしてもこのような調子になる。オリジナルのものはもう少し生き生きとしたものであるのでご了承いただきたい。また、現在、恐竜化石関係で三田発のエコツアーを企画している。このような生き生きとした話題がたくさんあるが、報告書の中には書き込んでいない。

また、報告書では、人数をはじめとした定量的な表現を大切にしている。それは、定性的なものに加えて、定量的な表現が基本計画の報告書としては重要であるからである。いずれ、費用対効果のような視点も必要になるかもしれない。

博物館：演示のメニューがあげられているが、これは全く新たな計画ではなく、博物館の今までの活動の延長であることを付記しておきたい。自然のものから受ける感動があり、これらを伝えるのに人が介在

する意味や可能性を感じている。その切り口として演示という概念がでてくるのであり、突然これが何の根拠もなしにでてきているのではない。これまでの実績に基づいている。

委員：人が介在するのであれば、人と関わったり文化と関わったりする側面が必要である。歴史博物館と連携するなど、他との関わりを見せていかないといけない。

委員：あるセミナーは、時間が夕方であるが、これはどのように運営するのか。また、夜に行う意義はどこにあるのか。

博物館：元々、神戸で夕方で行っていたが、施設の閉鎖があったことと、参加者の要望の中に三田で行ってほしいという声があったために当館で行うことにした。仕事が終わった人が参加できるように夕方の時間を設定している。運営の方法としては、4Fのフロアだけを開けて入館してもらう。

博物館：基本的にセミナーは有料であるが、オープンセミナーと称する無料のものもある。

委員：サテライトは今後全て引き上げるのか。あるいは他の所をサテライトとはしないのか。サテライトは設けた方がよい。

博物館：昨年まで県立大学のフロアでも行っていた。

博物館：セミナーガイドなどには書いていないが、キャラバン事業などを通して、実施的にはサテライトとして位置づけている施設がすでに多数ある。今後、神戸で重点的に営業することにおいては、実質的なサテライトをつくることも狙っている。

天川委員の指摘について。言葉や報告書のできの問題があるが、ひとはくに壁があり、それをどのようにしてその壁を破るのかというのが問題で、それには人が介在するしかない和我々は考えており、それが基本計画の根本にあった。ところが、この報告書では、新しい施設ありきで計画を考えている面もあるので、そのような面があまり前にでていない。

委員：人が介在するというのは良い考え方である。社会学の分野では三角形的欲望という考え方がある。モノの後ろに隠れていた学芸員が前に出てきて、来館者と展示物、学芸員という三角形が形成されることは大切で、これからの潮流として正しい方向といえる。また、満足度を一次元で評価するのは終わった。これからは期待値と満足度をもって評価すべき。これはホテルなどでも用いられている指標である。これからは、ITの時代となる。リアルな集客だけでなく、バーチャルな集客も考えることにより、潜在顧客層を引きつけることができる可能性があり、たとえば次世代の子どもを引きつけることができる可能性がある。例えば、携帯電話などを使ってもよいのではないか。バーチャルをいかに活用するかという論点がないのが、次世代の博物館を考える上での問題である。

委員：潜在顧客層というのが無関心層にかわる言葉であるような気もする。

#### 閉会挨拶（岩槻館長）

兵庫県立人と自然の博物館として最低限やるべきことは、県民の自然環境の生涯学習を支援することである。博物館における人と物の対応を考えて、博物館活動をどう展開させていくのかということを改めて考える必要があるが、なかなかご理解いただけない面もある。今のひとはくの活動については、たいいてい人は良い評価をつけてくれるが、もっと機能を高めることが学習支援活動にとって重要である。それをさらに展開する必要があるが、今の段階ではこれらの諸活動は館員の”大和魂”で支えられている面がある。560万人の県民に伝えるためには、館員の”大和魂”なしでもできるような仕組みが必要で、そのための方法論を描いたのがこの基本計画である。今回の計画では、残念ながら予算は付かなかった。あまり、大和魂を期待せずとも、これらの事業をすすめることができる方向にシフトするべきと考えている。今日のご意見を踏まえながら、さらによりよい方向で展開していきたい。今後も継続的にご指導などいた

できれば幸いです。どうもありがとうございました。